

デイズ アフター

Days-after

■■■ 土佐清水物語 ■■■

これは来るべき南海トラフ巨大地震を想定して
中学生が綴った「希望の物語」です。

2017年6月5日午前7時40分、南海トラフ巨大地震発生…。
その時、あなたは何をしていますか？ 家族は、地域は、どうなっていますか？
2017年5月に、清水中学校の3年生それぞれが、一ヶ月先の自分を主人公にして800字の物語「防災小説」を綴りました。ルールはひとつ、物語は希望をもって終えること。
「まだ」起きていないことを「もう」起きたかのように綴る“デイズアフター”の世界を、ぜひ体験してみてください。



高知県

土佐清水市



元 町

いつもと変わらぬ朝…かと思ったが、寝坊してしまい、仕方なく7時40分に家を出ることになった。準備が整い、靴を履こうとしたとき、家のテレビの音が聞こえた。

「タラントラン、タラントラン、緊急地震速報です。強い揺れに警戒してください。」
いやっ音でか…。はあ!?

轟音とともに、微弱な振動が始まる。僕は直感で南海トラフだと悟った。僕は本能に従うがままに玄関の扉を蹴破った!なんてことはできず、急いで扉を開けて表に出た瞬間、この世のものとは思えない、想像をはるかに超えた強すぎるほどの揺れが、土佐清水を襲った。立っていることができず、地面にしがみついたまま、動くことができなかった。

やっと終わった。何分ほど揺れたのだろうか。久しぶりに立ち上がった僕は、周りの光景を見て愕然とした。人の気配はなく、ひび割れた岩壁と、崩れかけの家々が砂埃を上げていた。ふと思い出したのは家族だった。

今にも崩壊しそうな家の中を慎重に進んでいくと、気を失っていた母と妹が、机の下にうずくまっていた。歩み寄ろうとしたその時、山側からざっきとは別の轟音が聞こえてきた。そして行動を取る前に、目の前が真っ暗になった。

冷たい…。僕は目を覚ました。がれきによって光が遮断されているのか何も見えなかった。が、土砂崩れが起きたことは理解できた。足が痛い。身動きは取れないが、足を怪我したらしい。それに雨の音もする。不気味なほどの冷たさは雨によるものだった。

あれからどれくらいたったのだろうか。助けを待つ間に日付が変わったらしい。眠っていた僕は「ここにいるぞ!」という声で目を覚ました。突然周りが明るくなり、まぶしいほどの光が僕を包んだ。

中西樹平



下川口

朝から今にも雨が降りそうな天気だ。バスに乗り、いつもの景色を見ながらゆっくり出発する。洗濯物を手にし、干そうか迷っているようなおばあさんがいる。そして7時39分、バスは3個目である下川口浦のバス停へ止まる。

7時40分、バスのドアが開こうとしたその瞬間、運転手さんの携帯が「地震です」と鳴り、間もなく揺れ始めた。激しい。私は頭が真っ白になった。混乱したが、運転手さんの指示により、揺れが収まると順番に外へ出る。ここから一番近い避難場所といえば春日神社だ。そこまで走れば約3分。若い私たちには十分だ。しかし、周囲の建物やブロック塀が崩れ、とても通りにくい。しかも、たくさんのお年寄りがいる。私たちは声をかけながら走った。

神社の階段まで着くと、上るのに困っているお年寄りや障がい者のところへ私たちが一人ずつ付き、手を貸しながら一緒に長い階段の頂上までたどり着いた。無事にたどりついた人ばかりではなく、こけで滑りやすくなっている階段やがれきでのけが人もいた。しばらくして、海から津波が押し寄せてくるのが見えた。みんな助かって良かった。

そして、一時間くらいたったのだろうか。雨がぼつぼつ降り始めた。建物は狭く、全員入ることはできないし、備蓄されていた食料も少ない。泣く人や怒る人などで場は混雑していた。とにかく助かって良かったが、私はずっと家族のことが気になっていた。母と父はもう仕事場に行ったのか、まだ家にいたのかもわからないし、兄二人は、離れた高校や大学にいる。みんなばらばらだ。

悩んでいたとき、ふと、「災害伝言ダイヤル」を思い出した。以前少しか家族みんなで話し合ったことがある。もう忘れてしまっているかもしれない、という心配もあったが、伝言が入っていることを祈り、近くの人の電話を借り、震える手でボタンを押した。すると、なんとみんな無事だという伝言が入っていた。私は泣いた。また、あとから入ってきた情報により、この南海トラフ大地震は「死者0人」だということだった。

谷脇碧唯



— グリーンハイツ —

今日は曇っているな、これから雨がふりそうだね、とありきたりな話を友達として
いると「地震です!地震です!」と校内放送が流れてきた。すぐに机の下に隠れた。
長く強い揺れがきて周囲の様子もわからない状態だった。南海トラフ地震だと思っ
た。しばらくすると揺れがおさまった。幸いなことに話していた友達は誰一人として
けがを負っていなかった。家族やまだ来ていない友達は大丈夫だろうかと心配だっ
たが、生きていると信じて友達と体育館に向かった。体育館はいつもと変わらず
壊れているところもなかったので、運営をする準備をした。しばらくして、下のほう
から多くの人々が避難をしに体育館へと入ってきた。僕は友達と協力して入ってき
た人の名前を書いたり、場所取りの誘導を行ったりすることにした。家族はまだ
来ておらず心配だった。少しすると、足や手などにケガを負った人が入ってきた。
僕たちは避難してきた中学生から、医務班などの役割分担を行い、先生や地域
の大人のみなさんと協力しながら避難を完了させた。少しして窓から外を見ている
と大きな津波が町を覆いつくさんばかりに迫ってきた。絶望だった。家族は見当た
らない。友達も何人か避難してきていない。波に押し流されていく建物を見ながら、
ただ茫然と立ち尽くしていた。少しすると、他の避難者が入ってきた。最後の列
に家族がいた。避難に困っていた人を手伝っていたらしく、少し遅れてしまったら
しい。友達の家族も避難できたらいい。

僕は運営としての役割をこなすことができた。しばらくして避難者の情報公開を
行い、友達も自分も家族との再会を無事果たすことができた。その後は力仕事や
自衛隊の物資の管理、道路の整備を行い、人の役に立てるよう友達に手伝って
もらいながら少しでも住みやすくなるよう仕事をこなした。しばらく日が経つと他の
地域の方々がボランティアとして手伝いに来てくれた。町は少しずつだが元の形に
復興していった。

鶴岡莉空



厚生町

息を切らしながら、もう少しで学校だ。と坂を上がっていたとき、ゴン!と低く大きい音になった。転んだのだ。だけど、そんなことはどうでもよかった。それは、今起きている地震のことで頭がいっぱいだったからだ。

揺れている間は、ほんとに数十分揺れているような感覚だった。揺れがおさまった。目をつぶっていたので、開けると建物が崩れていた。僕は、家族のことを考えた。どうしよう。どうしよう。どうしよう。…どうしていいかわからず、その場にうずくまり、わあわあさけんでいた。

すると見知らぬ人が「何をしている。そんなところでうずくまってどうする。生き延びるんだ。逃げるぞ!」と低く、力強い声で言ってくれた。その声で自分の中にかかっていたもやが晴れた。

揺れは止まっていたが、おそらく9分ほどで津波が来るだろう。なにか焦げ臭い。道路のほうから声が聞こえた。

助けを呼ぶ声だった。行ってみると、「助けてくれー!!」と男性が叫んでいた。車のドアに足を挟んだらしく、急いで救助した。まず、男性に「今助けます。痛いですが我慢をしてください。」と落ち着いた声で話しかけた。動転しているらしく、返答がおかしい。軽のワゴン車だったから、ドアから引っ張り出すのは簡単だった。それから、肩を貸して体育館まで運んだ。そして連れていく途中、自分が今できることを考えていた。

体育館に着いた。友達や家族、校長先生は無事なのだろうか。生きていい。そんなことを考えている。

体育館入口には、避難者の名前が張り出されていた。本部の仕事をしているのは生徒たちだった。さすが仕事が早いと思った。「ゴォォー」という音が響いた。たぶん津波だろう。

まだここにいる人は少ない。増えてくるといいな。下を向いてブツブツ言っていると、肩に何かがぶつかった。それは押し寄せてくる人たちの肩などだった。うれしい反面、皆焦っているから自分優先の考えにならないか不安だった。

「早くしろやー」と怒鳴りつけてくる人もいた。他にも自分の要求を叫ぶ大人たちがいた。自分は、こんなに慌てることがなかったから、すごく大人気ないと思った。自分は、興奮している人達を落ち着かせるために、「落ち着いてください。よく周りの人を見て、発言してください。そうやって自分ばかり主張していたら、いつまで経っても進みませんよ」

中には我に返る人もいたが、静まらない人もいた。自分の無力さを感じて、避難所の運営にあたることにした。運営を仕切っていた友達のりく君から、「料理の手伝いをしてくれ」と言われた。グラウンドで調理をしているということなので、さっそく向かった。作っているのが校長先生だった。ちょうど、作り始めのところだったので、手を洗ってさっそく自分も取り掛かることにした。自分はネギなどを切った。主に、野菜担当だ。家で料理を少し習っていたので、少々できる。

料理をやっているのが主に中学生だから、意思疎通は簡単だったので、ざっと300人くらいできた。校長先生は、まだまだ作る気だった。まるで、地震のことを忘れ、被災者に料理をふるまうことに喜びを感じているようだった。

それから数か月が経った。自分ら中学生は勉強をしつつ復興の手伝いとなっている。

やはり、国の援助の場所は偏っていたが、それでも助け合いで生きてきた。この町ならすぐに復興でき、活気が取り戻せる。そんな気がした。

井ノ上青虎

布

今日は曇りかぁ。雨が降ってきそうだ。そう思いながら僕はテレビの電源をつけた。そこから10分くらいが経っただろうか。ピロリン、ピロリンという音がする。何の音？僕のケータイから「地震です！地震です！」と流れた。僕は机の下に隠れこむ。揺れ出した。立ってられない大きな揺れが襲ってきた。家具が倒れる。長い揺れだ。南海地震なのか。揺れがやっと収まった。家族は全員外出していたので非常用リュックを持って一人で逃げ出した。お年寄りも子供も必死に逃げている。疲れるということを忘れ、僕は避難所まで走る。避難所に到着した。そこには、あふれんばかりの人たちがいた。僕は街を見た。その光景を見た途端に言葉を失った。押し寄せる壁のような波。その波は家をなぎ倒し、車まで押し流す。そこにはもう僕の住んでいた街の姿など、どこにもなかった。津波は、僕たちの避難所にまで押し寄せていた。

「逃げろ！ここにも津波が来るぞ！」

思わず叫んだ。

さらに上へ上へと逃げる。上の避難所に着くと、皆疲れのせいで倒れこんだ。僕も大きなため息とともに座り込んだ。

夜になった。ここには備蓄品があまりない。皆少ない備蓄品を分け合い空腹をしのいでいる。春だが夜は冷え込む。くっつきあい皆が寝ている。僕は疲れのせいかすぐ寝ていた。だが、ここには赤ちゃんが避難していた。大声で泣いた。みんなが飛び起きる。みんな文句を言っている。この状況で、みんなが怒り、赤ちゃんが泣くのは仕方ないと思う。でもこんな日が続く日が続くと考えると耐えられない。

いつになったらこんな生活が終わるのか。いつになったら僕たちの街が蘇るのか。それはまだまだ先になりそうだ。

山口伊織

下ノ加江

少し足早で広小路を歩く。目の前には、港がありいつものように船が浮かんでいた。

角をまがるといつも人がいない鯉の池に何人かの人だかりができていた。私は珍しいな、と思って通るときに耳をすませてみた。

「おかしいねえ…。」

そういう声だけがきこえた。私は何がおかしいのかわからないまま少し歩いてバス停についた。

「おはよう。今日も早いね。」

でも、いつも通り返事を返す子はいなく普段通りにバスを待つ。

そのとき、グゴゴゴゴゴゴゴォォ

山が騒ぎ出す。とたんに足にちょっとした揺れを感じた。

「地震！」そう言葉を発した時には私たちはすでに地面に小さく丸くなって身を守っていた。

揺れが収まるまで何分たっただろう。とたんに耳をすまさなくても聞こえるくらい大きな声で港にいた漁師の人たちが「はよう逃げろ津波がくるぞ！」と、叫んだ。

私たちは、避難所である谷へできるだけはやく、はやく走った。途中の道には、崩れた家々や、倒れた鉢植え、地割れなどがよく目立った。諦めながら走る老人やけが人を励ましながら上へと避難する。私は無事に避難所へ着いた。

家族もその後避難所へと着いたが、小学校へと通っている途中だった弟だけがない。私たちは心がいっぱいになりながらもそこで津波警報がなくなる2日間を地域の人と、ともに励まし合いながら過ごした。

解除されて少し経ち私たちは家へと帰った。家の前に一つだけ影がある。近づくとそれは弟の姿だった。みんな、涙を浮かべながら喜んだ。再会をこんなにも喜べたのは初めてだった。

山口百香

下ノ加江

6月5日、今日もいつものように友達とたわいのない話をして笑いながら約80メートルほど先のバス停へ向かう。すぐ隣にはがけがあり、その先には当たり前のように大きな海がすがすがしいさざ波をたてている。小さい頃からある山ぞいの古い家から、毎朝のようにおばさんが自分たちに大きな声であいさつしてくれる。「おは…」とぎれたあいさつに反応する暇も無く体が揺れ始めた。大木の葉がまたたくまに体にふりそそぐ。(地震だ…。) ゆれのおさまる前にそう確信した。思う事は何もなく、ただただ頭が冷え上がり、鳥肌がたっているだけで、ゆれがおさまった頃には恐怖のせいかずっと口があいて放心状態になっていた。

「りおな!!」

となりにいた友達が珍しく大きな声で自分を呼んだ。普段から物静かな彼女だが、いざという時でも冷静な判断を下してくれた。「もう少しで津波が来るかもしれないけん、山に行こう!」家のすぐそばにある鉄格子のお陰で命を取りとめたおばさんと一緒に3人で急いで走った。

鳴りやまない鼓動をおさめる暇もなく、避難場所の公民館へと向かった。そこには、命をとりとめ無事助かった人たちがいた。大人たちは物静かな空気の中でも、もくもくと話をつづけていた。ふと窓を見ると、自分たちの家は全く見えず、あるのは水だけだった。まさに地ごくだ。(もういやだ…。) こみ上げて来る涙を吸収性の良くないセーラー服のそででぬぐいながら、ただ茶色くどろどろした町を見つめるしかできなかった。

1ヶ月後、私たちはまだ公民館でくらしていた。月日が過ぎてこの生活になれた人もいれば、生きているだけで幸せだと自分をなだめる人もいた。全体的にポジティブな考えの人が増え、皆希望を持てた。

ある日、ギンギシと古びた戸が大きな音を立てて開いた。見知らぬ男性がぶ厚いふちどリメガネを左手でささえて上下させながら何も言わずスリッパをほうるようにして公民館の中へ入った。「仮設住宅ー」その男性と話していた父と母の口がだんだんと開き、笑顔になっていった。

さらに3日後、私は家族と仮設住宅でくらしている。地ごくの中で見つけ出した絆という希望を、私はこれからも大切にしたいと思っている。

矢野里緒菜

大谷

私はその日もいつものようにバスに乗った。今日のバスは狭かったせいか、最初は空いていた車内も窪津に着く頃には満席となり、私と友達は席を譲り、立ち乗りで窪津を出発した。バスは海岸線を通りグリーンハイツの坂を登り始めたが、お年寄りの話し声や小学生の笑い声で溢れていた。

坂を登り終わると、どこからか地震を知らせるアラームが車内に鳴り響いた。私と友達が顔を見合わせた瞬間、立ってられないような激しい揺れが襲ってきた。その時は自分の身を守ることに必死で、周りの様子など分からなかったが、人々の叫び声だけは聞こえていた。

数分後、揺れは収まった。揺れは短かっただろうが、私にとってそれは長く、長く感じた。最初は助かったという安心感があったが、次は大きな不安が私を襲ってきた。このバスには、お年寄りや小学生が沢山乗っている。助けられるのは私たちだけだった。

みんな無事だったようだが、近くには多くの家屋が倒壊し、電柱もなぎ倒されていた。この人達をどこにどうやって移動させたらいいのか分からなかったが、とりあえず近くの幼稚園に避難することに決めた。バスの中にいるよりは安全だと思ったからだ。

10分後、ようやく人々を移動させることが出来た。しかし、小学生やお年寄りは不安からか、予想以上に時間がかかってしまった。

無事移動することは出来たが、これからの生活に対する不安や、家族や友達のことなど不安は尽きなかった。そして同時に日頃の備えや防災に対する知識が必要だと感じた。今までも防災学習は何度かしてきたが、いざとなるとすぐには体が動かなかったのだ。

私はこれからもこの事を忘れずに前に進んでいきたいと思った。

山本妃菜

足摺岬

今日も学校かあ。ふと空を見上げると空一面が曇り空で覆われている。ついてないなあ。傘を持ってくるんだった。そんな独り言をつぶやきながら出発ギリギリのバスに駆け込んだ。その時僕は…いや誰もが今から起こる恐ろしい、悲劇を知る由もなかった。出発してバスの中の時計を見ると時刻は7時39分。40分に差し掛かろうとしている。時間を確認した僕は視線を窓の外に移した。その時だった!!急に視界が揺れだした。地震だ!即座にそう思った。僕はシートベルトをしていた為、大きな揺れにも耐えることができた。揺れはバスの中でもはっきり感じられる程大きなもので、永遠に続くような気さえた。揺れが収まり、バスの車内を確認すると中に乗っていた乗客全員が無事だった。安心とパニックでしばらくその場で立ち尽くしていた。しかし、はっと我に返った。安心などしている暇はないのだ。また、いつ地震が起こるのかわからない。それに、この地域は地盤が緩く、いつ土砂災害が起こるのかもわからない。そうなる前にも早く避難しなければならない。そこで皆と近くの避難所、旧松尾小学校へと向かった。その途中で、母親と再会した。母に家族の安否をたずねると、皆無事で、先に避難しているという。

今回の地震では、運も良く死者は出なかった。けれども建物等の崩壊による被害は計り知れない。それに、これから避難所でしばらく生活するとなると気が引ける。だが家族が無事だったことからするとこれくらい苦ではない。普段の何気ない生活が当たり前ではないと気付かされた貴重な体験となった。これからは、日々の生活に感謝し、地震ともきちんと向き合っていきたい。

松下壽哉

大 浜

曇り…か。どうせ梅雨入りしたから雨が降るのは間違いないな。あっ、傘持ってきてないし。と思いながら、中ノ浜を通って行くバスの中で、ポーッと窓の外を見ていた。お父さんはサンゴ漁に出ている。

私は、中学2年のころから南海トラフ巨大地震は来ないから大丈夫と思い続けていた。バスに乗っていたおばさんや高校生のお兄さんの携帯が、ピロンピロンと鳴った。私はあせったが、どっかで起こったんだなと思っていた。が、急に大きな揺れが襲ってきた。私はパニック状態になった。とりあえず、リュックで頭を守った。揺れはいったん収まり、バスの非常口で高齢者を助けながら中浜小学校へと逃げた。津波到達まで大浜が18分、中ノ浜が14分。中ノ浜にいた私たち全員が中浜小学校へ逃げ切ることができた。他にも大浜地区の人たちや中ノ浜地区の人たちも逃げてきた。その中には、私の同級生の友達もいた。友達が無事で安心したが、私にはもう一つ思っていることがあった。サンゴ漁に行っているお父さんはどうなったか。心配だった。

避難所での生活が始まった。お父さんがいないこの日に、どうしていいのか頭が混乱した。避難所生活の夜は、電気もつかず、いろいろ心配で寝れなかった。汐見町にいる親友のAちゃんはどうしているか、お父さんの安否の次に心配だった。パニックになる状態がいくどとなく続いたし、お父さんが帰ってこないで泣くばかりの日も続いていた。

5週間たって、お父さんを探しに清水の街へと走っていった。家の倒壊や津波の影響で活気のあった街がボロボロになっていた。私は、泣き叫びながらお父さんを探した。清水のいろんな避難所を探した。最後に行った避難所で、後ろから「麻莉」と呼ばれたので振り向いたら、お父さんが立っていた。私は「パパ、よかった無事で。ずっと心配で寝れなかったんだよ。」と言った。沖に行っていたのに、奇跡的に生きていてよかった。

2年たって仮設住宅を建てた。また、川田家の生活が始まった。まだ、余震は続いている。だが、お父さんと親せきの人全員が生きててよかった。

川田麻莉

汐見町

僕はいつも通り家にいた。いつもと何も変わらない日。僕はゆっくり着がえていると、「チャランチャラン、チャランチャラン、緊急地震速報です。強い揺れに警戒してください。」というサイレンになった直後ドーンという音とともに揺れだした。いきなり大きな揺れが来た。僕はパニックですぐには動けなかった。しかし、「やばい、隠れないかん」そう思い机の下に隠れた。激しい揺れが続く。部屋の中のテレビ、本棚、壁にかけていた写真などが、飛んでいった。テレビが窓ガラスにあたりガラスが割れて飛んできた。

まだ揺れている。揺れ始めて1分30秒ほど経ってやっと揺れが収まった。僕はすぐには動けなかった。お母さんに「はよ逃げるで!」と言われて逃げ始めた。

逃げていると、「いそげー!」「津波が来るぞ」というような声が聞こえて来る。僕は必死で逃げ中学校についた。中学校に行くと、もう既にたくさんの人がいた。僕らは家族みんなで体育館に入って空いたスペースに座った。僕は怖くて震えが止まらなかった。すると津波が清水の町を襲った。僕は何もわからなかった。いくつもの家が流されていった。

その夜、布団が配られ寝ることにした。だけど僕は怖くてなかなか眠れなかった。すると、赤ちゃんが泣き始めた。授業で見た、高知県が作った南海トラフ大地震想定ビデオでは「うるさい」「静かにしろ」などいろいろ言っている人もいたけど、今そんなことを言う人は一人もいなかった。そのうちに赤ちゃんは泣き止んだ。僕はいつの間にか眠りについていた。

何日か避難所生活が続き学校が再開した。学校に行くと誰一人も学校を休んでいる人がいない。みんな助かっていたのだ。中学生だけでなく高知県の人みんなが助かったのだ。家は津波に流されてしまったけど、死者が0人だったので僕はほっとした。

鉄本唯月

汐見町

いつものようにバタバタしながら小学一年の妹と母の3人で玄関を出た。狭い道を出て、母に「行ってきます。」と言ったその瞬間、「ピロリンピロリン…」母の携帯から奇妙な音が鳴り出した。「グラッ」という大きな揺れが、私達を襲った。立ってられないような大きな揺れが長く続いた。揺れがおさまり、顔をあげると、建物が崩れていたり、窓ガラスが割れていたりした。そのとき、市内放送で流れたアナウンスで、南海トラフ地震ということに気がついた。母が「早く逃げないかん!」と言い、家の入口に置いてあった持ち出し袋を持って3人で高台へと走った。国道321号線をはさみ、老人ホームがある。そこでは、たくさんの車と人で混雑していた。なかなか前に進めず立ち止まっていると母が「別のところから行くで」と言った。母のあとに直進のルートを目散に走った。やっと一時避難場所であるつつじヶ丘公園へ着いた。しばらくすると、町の方から何やら変な音がした。「ゴォー」清水の町を巨大津波が襲ったのだ。激しい勢いで町のみ込んでいった。鳴り響くサイレン。泣き叫ぶ子供たち。私は自分がなにをしたらしいのかわからず、ただただ津波でのまれていく町を震えながら見ているしかなかった。

どれぐらい時間が経っただろうか。ポツポツと雨が降ってきた。私たち3人は持ち出し袋の中にある、ブルーシートをかぶって雨をしのいだ。「いつ家に帰れるが?」妹が言った。「まだちょっと時間がかかるかもしれん。」と母が言った。私は何も言えなかった。私が見た清水の町は赤と黒の2色で染まっていた。町のいたるところで火災が発生したのだ。あのきれいな海はすっかりと表情を変えてしまっていた。私たちは、食事を摂るのも忘れて、そのまま寝てしまった。

それから3日程経った日、やっと長期避難所の清水中学校へと避難した。そこにもやっぱり大勢の人がいた。すると遠くから私たちの名前を呼ぶ声が聞こえた。父と妹だった。2人とも、私たち3人を探しに来てくれていた。元気な姿をみせてくれた。家族全員無事で、会えてホッとした。

徳永夢乃

下益野

行ってきます!朝、家を出てバス待合所に向かっているところだった。「緊急地震速報です、強い揺れに警戒して下さい。」突然の地区放送と、その時、立ってられない程の強い揺れに襲われた。周りの木が倒れ、家が倒壊し、電柱も倒れる。長い揺れだ。ふと思い出した。家族のこと…「みんな大丈夫なのかな?」そう思っていた時、ようやく強い揺れが収まった。家が近いから一度戻ろうと思ったが、自分の命を考えると、家に戻る余裕なんてないと思い、地区の避難所まで必死こいて逃げた。向かっていると近隣の人、出勤前の人達が避難している。高台に着いた。すると、下の方からお母さんも避難してきた。「無事で良かった。」と、言い合っていた時、「津波だ!」下を見ると津波がこちらの方に向かってくる。なのに、焦る様子もなく登ってくる2人の住民。「急げ!早く、早く!」ようやく自分達の声に気づいた2人は、一生懸命階段を登ってくる。ようやく着いた2人。「どうしてあんな焦ってなかったが?」と聞く。「津波がこっちに来るかわからなかったけん、大丈夫やろ思いよった。」と言った。もしあの時高台からの声がなかったら…2人は津波に飲み込まれていただろう。その数十秒後、津波がやってきた。僕達はさらに上に逃げた。昼は弁当があったが、誰も食べていなかったのでやめた。午後からも雨は止まずに、日が暮れた。夜は寒さをしのぐことで精一杯だった。

翌朝。大津波警報が解除され、避難所を後にした。途中、木と電柱が道をふさぎ、道路は割れ、何もかもがメチャクチャだった。家に帰ると、上の山が崩れ、家の中に砂や石が入り込んでいた。中にあるものすべてが倒れていた。あまりの光景に僕と母は言葉が出なかった。地区の区長場に向かった。そこに妹と父がいて、本当に安心した。4人が泣き崩れた。その後、地区で怪我人は複数いたものの、地区の死者は0人だった。下益野地区の全ての人が無事だった。

震度7の巨大地震の恐ろしさを知った。

池 直輝

三 崎

車で仕事に行く母さんに手を振ってバス乗り場に続く道を曲がっていた。バスの時間が気になり腕時計を見ると、7時43分だった。バスが来る45分まで、時間があつたので池のコイを見た。少しにごっていて、泥の臭いもする。いつもよりコイが活発に泳いでいる。「ピロリンピロリン…。」と緊急地震速報が鳴った。反射的にその場にしゃがみ込んだ。遠くから、ゴゴーという小さな音が聞こえ、すぐに揺れだした。すぐに揺れは大きくなり、道路の端のブロックに必死につかまった。ものすごい揺れた。起震車で体験したことはあつたが、比べ物にならないほど大きく、そして長く感じた。気づくと揺れが止まっていて、腕時計は7時45分を指していた。「にげろー!」大きな声が聞こえ、状況が分からないままかけ出した。下りて来た坂道を全力でかけ上がっていた。パニックで何も分からない。でも、いつもの道ではない。電柱が倒れ電線が切れて火花を散らしている。山の木が何十本も通路をふさぐ様に倒れていて、土砂崩れで土も流れてきている。坂を上り切った。自分の家は大丈夫だったが、崩れた家から火災が発生していた。避難場所の広い所に行った。「ゆうき君、よかったねえ。無事やったかえ。」隣の家のおばあちゃんの声がした。僕はもの凄く安心した。おじさんも無事だった。僕は少しパニックしていた気持ちも減り、落ち着くことができた。すると、「家崩れる前に荷物取ってくるけん。」とおじさんが言った。「いかんで!余震が来るかもしれんけん、行ったらいかん!」僕は必死で叫んだ。「ほんまやね。止めてくれてありがとう。」おじさんは行くのをやめてくれた。「お父さん、娘は大丈夫やろか。」とおばちゃんが言った。「母さん!!」手を振ったばかりの母さんを思いだし、妹、父、祖父母のことが心配になった。しかし連絡することもできず、皆が無事であることを信じるしかなかった。頭の中で何度も何度も家族の名前を叫び続けた。

細川優輝

三 崎 浦

梅雨の時期の曇りは薄くジトジトしていて嫌いだった。早くバスが来んかな。そう思いながら今にも雨が降りそうな空を眺めていた。その時突然、地面が大きく揺れた。私はその揺れが強すぎて転んでしまった。それはとても大きな縦揺れだった。その瞬間、私の頭に3.11という言葉がよぎった。絶対南海トラフや!私は物のないところに動こうとしたが揺れの強さと怖さで全く動けなかった。とにかく怖かった。リュックで必死に頭を守った。私は目を開いた瞬間、目の前の光景に釘付けになった。自動販売機が道路まで移動し、時計台があっけなく折れていた。「逃げろ!津波が来る!」友達の大声でようやく我に返った。海からゴゴゴと聞こえてくる。私は必死の判断で山の中にある避難所へ走った。坂道まで走って、少し後ろを振り返ると、遠くに堤防を乗り越えた津波が迫ってきた。私はもう、何にも考えずに山の頂上まで走った。山の頂上には、人々の不安な声が溢れかえていた。息を切らしながら、私は山の隙間から下をのぞいた。次々と家屋を飲み込んでいく津波。とにかく大きな波。私は言葉を失い、寺の段差に座り込んだ…。

大津波警報が解除されたのは、次の日の昼。避難所には、小学生の弟も逃げてきていたので、弟は大丈夫だった。父と母がとにかく心配で、私たちは下まで降りて探しに行った。三崎の町は、家の瓦礫や泥でぐちゃぐちゃだった。昨日までの平和な町が崩れた。私は思わず涙が出た。「おーい!」私たちはふと後ろを振り返ると、別の避難所に逃げていた父と母が走ってきた。4人共無事だったということに驚き、私はまた泣いてしまった。

あれから何ヶ月かが経った今、学校が再開した。そこには、ほとんどみんなが来ていて、久しぶりの再開に笑顔と涙が溢れていた。教室に入り、みんなが揃うと、先生は黒板に大きくこう書いた。「土佐清水市、死亡者0人」

扇喜麻由